

桜・梅の社会文化史

—近世江戸の花の名所に着目して—

Study on Socio-Cultural History of cherry blossom and ume blossom
-Focusing on showplaces of flower around Edo city of the Edo-period-

学籍番号 096771
氏名 古市 真美 (Furuichi, Mami)
指導教員 辻 誠一郎 教授

1. はじめに

1.1 研究の背景

近年、都市やそこにおける人々を支えるものとして、都市生態系が注目されている。ここでの都市生態系とは、「都市やそれに関わる地域を舞台とした生態系」を指し、人の活動も含んでいる。そして、その都市生態系の1つの装置として「花のある場所」がある。これには例えば桜のある上野公園、梅のある湯島天神が挙げられ、レクリエーション機能等の重要な役割を果たしている。

よって、造園学や生態学など様々な観点で研究が行われているが、場所性にとって重要な要素である花の種類に注目して論じたものは少ない。花は自然的存在のみならず社会的存在でもあり、様々な社会文化的要素との関連の蓄積を有する歴史の産物である。したがって各花で関連してきた、また関連している社会文化的要素(以下、関連要素)が異なるため、花が場所性に及ぼす影響は異なると考えられる。しかし、こういった観点からの研究は見られない。これらより、関連要素との関わりの歴史を社会文化史と定義し、社会文化史の視点から花の歴史の実態を捉え、それが場所性に影響することの実証、どのように影響するかの把握が必要と考えられる。

1.2 研究の目的

本研究では、①花を社会文化史から捉え、花の

歴史の実態を整理すること②それが花のある場所に関連することを実証し、どのように関連するかを考察することを目的とする。

2. 研究の対象と方法

2.1 研究の対象

対象の花は、「春來を告げる花木」として、花文化・園芸において代表的な2種とされてきた桜・梅とする。対象地・対象時代としては、代表的都市東京の基盤である近世江戸を取り上げる。近世江戸は花文化が大衆化した時代であり、花のある場所の成立や大衆化の時点を対象とできると考えられる。また、花のある場所として多くの都市住民に関わるという理由から花の名所を取り上げる。

2.2 研究の方法

まず、社会的存在として桜・梅を扱う既往研究・文献を整理し、その中で社会文化史の位置づけを明らかにする。次に、文献調査によって各花の歴史を社会文化史という視点で捉え直して整理し、花の歴史の実態を把握する。そして最後に、近世江戸の花の名所において、各花の名所の実態を把握・比較し、花の歴史の実態との関連を考察する。

3. 社会的存在としての桜・梅の研究

桜においては様々な文献があり、概説書、庭園文化・花見の文化を論じたもの、軍国主義との関連やソメイヨシノを論じたもの等が挙げられるが、桜の歴史全般に関するものを羅列したものにすぎ

ない、領域・時代が限定的といった特徴がある。

梅においては文献が少なく、概説書や菅原道真に関するもの等があるが、桜と同様に歴史全般に関するものを羅列したものにすぎない、分野が限定的といった特徴がある。

しかし、花の歴史の実態は各方面から通史的に蓄積されていくため、その特徴を把握するにはより全般的な見方が必要である。よって、本研究では社会文化的要素と花の扱いとの関わりを全般的・通史的に整理し、花の歴史の実態を考察する。

4. 社会文化史からの整理

4.1 桜

関連要素と扱いの関わりを経緯の主流は以下である。基層に「山にあるもの」としての意義があることから山の神・生命力・稲と繋がり、やがて修験道の聖地である吉野山と結びついて、それが政治的聖地となることを通して政治的権力の象徴となった。その結果、都市に広まり主に貴族によって豪華な花見の宴が行われ、富・権威のシンボルとしての価値や審美的価値に重きをおいた貴族・都市の花となった。そしてそれ以降は王朝文化への憧れから、各階層・地域に桜の扱いが伝播した。

一方で、花祭りを行う浄土宗等の仏教、鎮花祭を行う悪霊や疫神を鎮める神社、農耕儀礼(豊作の予祝、山行きなど)との関連も有し続け、古くからの生命力の象徴としての扱いも続いており、これが富・権威や美の象徴としての桜に影響を及ぼし続けている。以上が桜の歴史の実態である。

4.2 梅

関連要素と扱いの関わりを経緯は以下の通りである。基層に中国から流入した「栽培植物」としての意義があり、それにより武の氏である大伴氏と関連し中国から梅花を見る文化(雅という思考)が流入した。その後庭園文化の流入や、中国文化を好む風潮から宴・花見に取り入れられた。そし

て中国から流入した学問の象徴・禅における悟りの象徴等が日本に根付き、更に貴族文化へと取り込まれ、貴族文化への憧れから、各階層・地域にそういった梅の扱いが伝播した。ただし桜に比べて特に趣味のある人に多かった。一方、果樹・禅での利用は依然行われていた。

このように、中国から流入する梅観を中心とした実用・禅などに関わる質素な梅観と、日本の貴族文化において美や雅として取り扱われる華美な梅観の2つの潮流があり、中国から絶えず前者が流入し、それが後者へと影響または吸収されていくといえる。以上が梅の歴史の実態である。

4.3 各花の歴史の実態に関する考察

このように各花は多様に扱われるが、桜は華美な花観が肥大し、梅は華美と質素の2つの潮流があるというように、実際的な実態に差が見られた。

この背景には各花に通底するものが存在すると考えられる。桜は基層に「山にあるもの」という意義があり、それから波及する要素は公的・権威的・開放的であり、偉大で遠くにあるものを愛でるものに占められる。例えば浄土宗は極楽浄土に転生するため念仏を唱えるものであり、間口が広く、庭園は記号が多い。桜は「山にあるもの」という本性を有し、それに伴い公的・権威的・開放的な社会文化的要素と関連しやすいと考えられる。

一方梅は基層に「栽培植物」という意義があり、それから波及する要素は私的・内的・閉鎖的であり、限られた抽象的なものへ向かうものに占められる。例えば禅の思想は、坐禅により意識を内奥に向け自己の本性に立ち返ることを目指すものである。庭園はゼロ記号を目指す。このように、梅は「栽培植物」という本性を有し、それに伴い私的・内的・閉鎖的な社会文化的要素と関連しやすいと考えられる。

これらが実際的な実態やすみわけを生じさせていると考えられる。

5. 近世江戸における花の名所

5.1 名所の抽出

花文化・名所が栄えた近世後期の代表的な名所案内記である『江戸名所図会』『江戸名所花暦』から、桜 57ヶ所、梅 20ヶ所抽出した。

5.2 名所の立地区分

江戸の名所は城からの距離で様態が異なることから、市中・近郊・遠隔地の3つに立地を区分し、地誌・縁起等の文献や絵図より各花の名所の属性・魅力要素・花の扱いを見ていくこととした。

区分の定義は、市中を墨引内、近郊を墨引外かつ朱引周辺内、遠隔地を朱引から離れた名所とした。

また、魅力要素としては『江戸名所図会』の記述を表1のように分類し、記述数を集計した。

表1 魅力要素概要

魅力要素	概要
物	堂・祠・社、仏像・什器など
行事	祭礼・市など
自然	植物・石など
商業	商業施設など
眺望	名所からの眺め
群集	人々の群集する様子
門前	門前の賑わいの様子
名物	料理・土産など

5.3 桜・梅間の比較—江戸市中の花の名所

各花の名所の概要を表2に表す。これより、桜には権威のある寺社が多く、魅力要素が多様であることから、総合遊覧地の中心となっている所が多いことが考えられた。一方梅には摂社・旧地など付属的な所が多く、総合遊覧地の一部として含まれるという位置づけの所が多いと考えられた。

この元となるものとして、桜では植栽背景に「吉野山の模倣」「寄付」「遊園整備」「庭木利用」等があり、花への関連要素に「王朝文化」「権威」「庭園文化」等が認められた。一方梅では植栽背景に「天神の神木」「庭木利用」等があり、花への関連要素に「天神」「庭園文化」が認められた。これらより、江戸幕府の都市政策によって、土地や寺社

地が大半を占める市中では、権威・王朝文化・宗教的な要素が関連しやすかったと考えられる。

表2 江戸市中の花の名所概要

	桜	梅
属性	寺社	寺社(天神が多い)
	寺社(名木)	寺社(名木)
	武家屋敷(上級)	武家屋敷(下級)
	遊廊	茶屋
魅力要素 (概観)	物、行事、自然など各々が 多様	自然を重視
	花の扱い (概観)	多い本数 広がりのある植栽 景色・背景として楽しむ

表3 江戸近郊の花の名所概要

	桜	梅
属性	寺社	寺社(天神が多い)
	寺社(名木)	商人の庭園
	高台、川	
魅力要素	物、行事、自然など多様な 所が一地域に集合	物、行事、自然など多様な 所が一地域に集合
	花の扱い	多い本数 広がりのある植栽 景色・背景として楽しむ

表4 江戸遠隔地の花の名所概要

	桜	梅
属性	寺社(名木)	寺社(名木)
	川	村
魅力要素 (概観)	物、行事、権威など多様	自然が主
花の扱い (概観)	少ない本数 花を楽しむ	少ない本数 囲われた植栽 花・実を楽しむ

5.4 桜・梅間の比較—江戸近郊の花の名所

各花の名所の概要を表3に表す。これより、桜・梅共に魅力要素は名所により多様で、王子・品川など遊覧地が集合する地域に含まれるものが多く、それらが集合して総合遊覧地を形成していると考えられた。しかし、梅は桜に比べて徳川縁が薄い名所が多く、眺望がなく小規模な所となっている。

この元となるものとして、桜では植栽背景に「遊園整備」「灌仏会のための植栽」等があり、花への関連要素に行楽化された「貴族文化」「仏教」が認められた。一方梅では植栽背景に「天神の神木」「庭木利用」「梅見の販売」があり、花への関連要素に「天神」「庭園文化」「栽培」が認められた。これらより、近郊は町人・農民が居住する都市と農村の境界であり、近世中後期に自然との接触を重視した新しい総合的な遊覧地が多く整備されたことから、行楽化された王朝文化や灌仏会と関わる仏教、商人の庭園が関連しやすかったと考えられる。

5.5 桜・梅間の比較—江戸遠隔地の花の名所

各花の名所の概要を表4に表す。これより、桜では魅力要素が多様なことから、権威・利益などを求めて多数の一般民衆も訪れたと考えられる。一方梅では「自然」が主な魅力要素であり、遠隔地へ自然を観賞するのは特別に興味人に限られたことから、訪れた民衆は限られたと考えられる。

この元となるものとして、桜では植栽背景に「偉人による又は偉人のための植栽」「堤の補強」「水毒の浄化」があり、花への関連要素に「実用」が認められた。一方梅では植栽背景に「偉人による又は偉人のための植栽」「天神の神木」「梅実利用」があり、花への関連要素に「天神」「栽培」が認められた。また、桜・梅共に名木としての役割があった。遠隔地は行楽の文化が成長するにつれて名所として目を向けられ始めた、農村や鎌倉時代の古刹からなる地であることから、名木や農業としての花が扱われやすかったと考えられる。

5.6 名所の在り方と花の歴史の実態との関連

以上のように、各花で名所の在り方に差がみられた。全体として見られるのは、桜では①多様な魅力要素②多様な人々の来訪③景色・背景としての楽しみ、梅では①限られた魅力要素②特別に興味の有る人の来訪③花・実の楽しみ、である。この背景には、「山にあるもの」という本性を有する公的・権威的・開放的な桜と、「栽培植物」という本性を有する私的・内的・閉鎖的な梅といった歴史的に通底する対比が見て取れる。実際に山や栽培との関わりが各花の名所に直接表出している。

そして、それは地域としての特徴や名所の特徴の違いから、現れる関連要素の違いに通じて立地区分によって異なった形で表れ、名所のあり方や区分内のすみわけに繋がっていくと考えられる。桜・梅共に、華やかな花観と関わる要素が市中に多く、それ以外の部分が近郊・遠隔地に多かった。

6. 結論と展望

以上のように、歴史の実態が名所の場所性に関連することとその内容を考察できた。各花は様々な要素と関連し姿を変えるが、通底する性質があり、それは花がある場所の場所性にも否応なく現れてくると考えられる。具体的には、桜は「山にあるもの」という本性を有し公的・権威的・開放的な象徴として、一方梅は「栽培植物」という本性を有し私的・内的・閉鎖的な象徴として、そういった場所性を名所に与えた。現代の花のある場所も同様にそれが現れていると考えられる。

人が自然に見出してきた意味合いは多様でありながら一貫した部分も有しており、それを把握することは各時代・各空間で自然の扱いを適切に選択する基盤となるであろう。人と自然のかかわり史の意義はここにあると考えられる。

<主要参考文献>

斎藤 月岑(1834-1836)：江戸名所図会。

岡山鳥(1827)：江戸名所花暦。